

全国学力・学習状況調査の結果分析を 共通実践につなげる校内研修会の持ち方について

The Implementation of In-House Training Workshops to Apply National Academic and Learning Survey Results into Common Practices

大橋 宏星
Kosei OHASHI
滋賀大学大学院教育学研究科

<キーワード> 授業改善 校内研修会 全国学力・学習状況調査の結果分析 共通実践

1. はじめに

平成 19 年度から始まった全国学力・学習状況調査は今年で 15 回目の実施となった。平成 23 年度と令和 2 年度においてはそれぞれ東日本大震災の影響、コロナ感染症に係る学校教育への影響等を考慮して、調査の実施は見送られたが、ほぼ毎年全国の小学校 6 年生と中学校 3 年生対象に実施されている。平成 19 年度から平成 21 年度は悉皆調査、平成 22 年度から平成 25 年度までは抽出調査及び希望利用方式、平成 26 年度からは悉皆調査として実施されてきている。全国学力・学習状況調査は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立することを目的として実施されている。¹⁾ 悉皆調査が本格的に実施された平成 26 年度以降は、都道府県や市町教育委員会はもちろん、各学校で調査結果を分析し、指導の検証・改善を進めている。

滋賀県においても、毎年調査結果を分析し、見られた成果や課題について指導の重点として示し、県内全ての学校に指導主事が訪問し直接指導を行っている。各学校においても夏休みに校内研修として調査問題を解いたり、調査結果を分析して各校の成果と課題を分析したりして、2 学期以降の授業改善に努めている学校も多い。

ただ、調査結果の分析において、該当学年の教師とそうでない教師の課題意識の違いや、分析結果を授業改善に生かし切れていないこと、学校全体の共通実践としての取組に反映しきれていないことに課題があると感じている。今年度の全国学力・学習状況調査の学校質問紙(小学校)においても、「令和 4 年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか」という質問項目に対し、強い肯定の回答は

29.3% (全国平均 33.1%)²⁾ に留まっており、全国学力・学習状況調査の結果分析を、教育活動に有効に活用しきれていないと感じている管理職も多い。

そこで本稿では、全国学力・学習状況調査からみられる滋賀県の課題を整理するとともに、調査結果の分析について校内全体で共有するためにはどのように取り組むのか、また、共通実践を行うためにはどのようにしていけばよいか、教員の意識調査をもとに考察していきたい。

2. 全国学力・学習状況調査

2-1. 小学校算数科の内容領域の見直し

平成 29 年 7 月告示の新学習指導要領では、指導事項のそれぞれのまとまりについて、数学的な見方・考え方や育成を目指す資質・能力に基づき、内容の系統性を見直し、領域を全体的に図 1 のとおり整理し直された。³⁾ それに伴って令和 3 年度より、全国学力・学習状況調

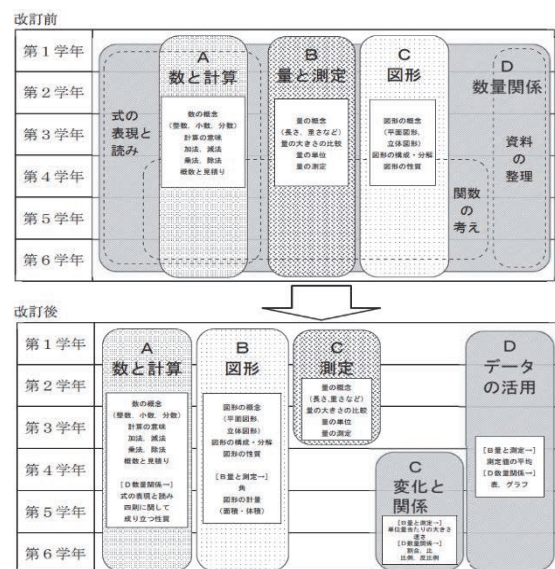


図 1 内容領域の見直し

出典 小学校学習指導要領(平成 29 年)解説 算数編

査の問題についても、新しい領域で出題されることとなった。そこで、令和元年度以前の調査問題を、新学習指導要領の領域ごとに整理し直し、領域ごとの設問数や、問題形式ごとの設問数などを整理することにした。整理については、国立教育政策研究所教育課程研究センターの全国学力・学習状況調査解説資料⁴⁾と、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説算数編をもとに行った。

全 15 回の全国学力・学習状況調査の設問数については以下の通りであった。

- A：数と計算・・・188 問
B：図 形・・・113 問
C：測 定・・・24 問
C：変化と関係・・・62 問
D：データの活用・・・60 問

問題によっては、複数の領域の内容にまたがって出題されているものもあり、それらの問題については両方の領域でカウントした。

「数と計算」領域の問題が非常に多く、次いで「図形」領域の問題が多かった。平成 30 年度までは、主として「知識」に関する問題の A 問題と、主として「活用」に関する問題の B 問題とに分かれており、A 問題に「数と計算」領域の単純な計算問題が数問出題されていたことも「数と計算」領域の設問数が多い理由の一つである。「数と計算」領域と「図形」領域の設問数が多い理由として、このことの他に、他領域の問題を解決する際に、「数と計算」領域や「図形」領域の知識・技能を活用して解く問題が多く出題されていることも理由の一つである。小問の数としてはばらつきがあるが、総じて四領域の中からバランスよく出題されている。

2-2. 滋賀県の学力調査の状況

過去 15 年間の平均正答率を滋賀県と全国で領域ごとにまとめると図 2 のようになった。この結果から、どの領域においても全国平均より 2 ポイント前後下回っており、特に「図形」領域が全国と 2.5 ポイントの差があり、一番落ち込みが見られた。滋賀県教育委員会が示している「全国学力・学習状況調査の結果課題の改善に向けた取組の重点」⁵⁾においても今年度の取組の重点として、「底辺と高さの關係に着目し、図形の面積の求め方から面積の大小を判断することができるような学習活動を充実させる。」ことが示されている。また、令和 3

	設問数	正答率		正答率 全国比較
		滋賀	全国	
A 数と計算	188	67.6	69.4	-1.8
B 図形	113	62.0	64.6	-2.5
C 測定	24	59.3	61.4	-2.1
C 変化と関係	62	54.3	56.5	-2.2
D データの活用	60	58.8	60.8	-2.0

図 2 領域別正答率

年度についても「図形を構成する要素などに着目し、面積の求め方について筋道を立てて説明できるように指導する。」⁶⁾ことが示されており、図形領域は滋賀県において経年の課題の一つである。ただ、直近 4 年間の領域別全国平均正答率との差（図 3）を見てみると、「図形」領域の改善傾向は見られる一方、「数と計算」領域については落ち込みも見られ、近年の課題となっていることが分かる。

問題形式別に平均正答率をまとめると、図 4 のようになった。記述式の問題形式の平均正答率が、全国平均と同様に他の形式と比べ大きく落ち込んでいる。また、全国平均と比較しても 2.6 ポイントの差があり、滋賀県の子どもたちは記述式の問題に課題があることが分かる。

また、無解答率の高さが滋賀県の大きな課題の一つであったが、図 5 のように年々無解答率は低くなっている傾向にあり、今年度の結果では、全国よりも無解答率が低い問題も複数問あり、大きく改善してきている。これは、多くの学校で子どもが理由や事実、方法を説明し合う活動に力を入れて取り組んでいる成果が出てきているのではと考える。正答を追求するだけの授業ではなく、正答に行きついた過程を説明したり、考えた根拠等理由を説明したりする活動のさらなる充実を期待したい。

さらに、記述式の問題 71 問を領域ごとに分類し、正答率をまとめたものが図 6 である。これについても、複数の領域の内容にまたがって出題されているものについては両方の領域でカウントした。

この結果を見ると、どの領域においても全国平均と 2 ポイント以上差があり、領域によって大きな違いは見られない。ただ、「図形」領域においては、全ての形式での正答率の全国差が－2.5 ポイントであったが、記述式の問題の正答率の全国差が－2.0 ポイントと、差が縮ま

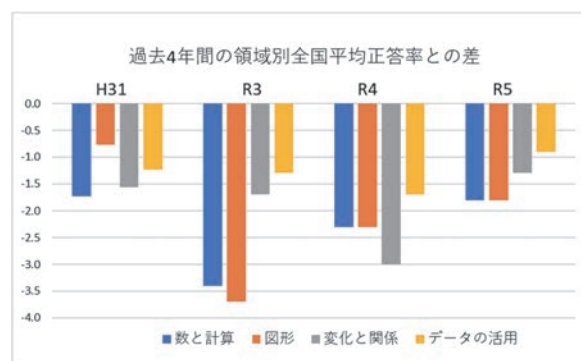


図 3 過去 4 年間の領域別全国平均正答率との差

	設問数	正答率		正答率 全国比
		滋賀	全国	
選択	133	65.4	67.4	-1.9
短答	188	73.2	75.1	-1.9
記述	71	37.5	40.1	-2.6

図 4 問題形式別正答率



図5 記述問題の無解答率（全国との差）

	設問数	正答率		正答率 全国比較
		滋賀	全国	
A 数と計算	29	41.2	43.8	-2.7
B 図形	21	33.3	35.3	-2.0
C 測定	7	39.3	42.0	-2.7
C 変化と関係	18	32.5	35.8	-3.3
D データの活用	16	35.6	38.3	-2.7

図6 記述問題の領域別正答率

る結果から「図形」領域においては、「選択式」「短答式」の形式の方が課題が大きいと考えられる。つまり、「図形」領域においては基礎的な知識・技能の定着が大きな課題の一つであると考えられる。

2-3. 滋賀県の取組

滋賀県では、平成27年3月に「学ぼう力向上滋賀プラン」を策定し、「学ぼう力」を「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」を支える力と位置づけ、「学ぼう力」育成の取組を進めてきた。4年間の取組で、「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦する子ども」の割合が増えたり、「めあて・ねらい」を示したり、「話し合い活動」を取り入れたりする授業スタイルが普及したりするなど、県全体での成果が見られる一方、依然として基礎的・基本的な知識・技能の習得や、自尊感情の向上、主体的に学習する態度の育成などに課題が見られた。⁷⁾

平成31年3月には、4年間の取組の成果と課題や急速な社会情勢の変化などに対応するため、これまでの「学ぼう力向上滋賀プラン」の理念を踏まえつつ、「読み解く力」の育成に重点を置いた「第Ⅱ期学ぼう力向上滋賀プラン」を策定し、「学ぼう力」を向上する取組を推進してきており、今年度で本プランの終期を迎える。「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりも県内全域に浸透してきており、授業理解度の向上など成果が表れてきている一方、基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる。「読み解く力」の育成と併せて基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、確かな学力へつなげていくことが求められていると、滋賀の教育大綱第4期教育振興基本計画素案で記されている。⁸⁾

滋賀県教育委員会では、年度初めに昨年度の学校の現状と課題から、今年度は具体的にどのようなことを重点的に取り組んでいくのかを全職員で共通理解・共通実践

するために「我が校の学ぼう力向上策」を作成するよう各学校に求めている。「我が校の学ぼう力向上策」は、視点1「学びを実感できる授業づくり」、視点2「学ぼう意欲を引き出す学習集団作り」、視点3「子どものために一丸となって取り組む学校づくり」の3つの視点において、今年度重点的に取り組む事項を指標とともに設定するものである。

また、全国学力・学習状況調査の分析結果から、「指導の重点」を示したり、学ぼう力向上の取組が推進されるよう学校訪問を行って助言したりしている。11月から1月にかけては、滋賀県独自の「学びのアンケート」と「学びの基礎チャレンジ」を実施している。「学びの基礎チャレンジ」については、滋賀県の平均正答率をもとに分析ツールを提供し、どの問題に課題があるのかを、個人レベルでも分かるようにしている。さらに、個人個人の課題にあわせて、県で作成している学び直しプリント（ガッテンプリント）の活用を促している。

このように、各学校では、学校の現状に応じた課題を把握し、改善・実行するPDCAサイクルを2度回すように計画されている。「我が校の学ぼう力向上策」で示した取組の重点事項を学校全体で取り組み、「全国学力・学習状況調査」や「学びのアンケート」「学びの基礎チャレンジ」等で取組を評価し、授業改善・学校改善につなげている。

本稿では、全国学力・学習状況調査を学校現場ではどのように分析し、授業改善・学校改善に生かしていくとよいか、実際の校内研修においての実践をもとに考察していきたい。

3. 研究の内容及方法

3-1. 校内研修会の内容

全国学力・学習状況調査の目的に掲げられている通り、教育委員会・学校は、教育政策や授業改善等のPDCAサイクルを回すために調査結果を活用することが求められている。また、調査問題については、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージが込められていることから、調査問題を実際に解き、どのような力の育成が求められているのか、どのような授業改善を目指していくべきなのかを事前の研修会で実施してもらったうえで本研修会を実施した。

まず、研修会を始める前に「自校の伸ばすべき、資質能力とはどんなものか」を理由・根拠とともにワークシートに記入していただいた。その後、パワーポイントのスライドをもとに下記の内容で研修を行った。

① 調査問題の把握

今年度の調査問題から、どのような資質・能力が求められているのか、どのような授業改善が求められているのか、授業改善へのメッセージを読み取る活動を行った。

② つまずきの傾向の把握

問題種別調査結果から、学習指導要領の領域別の正

答率や、問題形式別（記述式・選択式・短答式）の正答率を県や国の平均正答率と比べて、分析を行った。その際に、今年度の結果だけではなく、過去3年間の調査結果をもとに経年での成果と課題を分析した。

③ 記述問題の実態把握

記述問題の解答類型から誤答の把握をし、無解答が多いのか、説明不足の誤答が多いのか、知識・技能不足の誤答が多いのかなどの傾向をつかんだ。

④ 誤答の様子から指導を考える

過去の調査結果の解答類型から、子どものつまずきや思考を考え、どのような指導をすればよいかの例を挙げ、今年度の解答状況をもとに分析を行った。

⑤ その他

児童質問紙の結果から、学校全体としての取り組みの成果や課題を考えたり、四分位分析グラフから、どの層の児童が多いのかを把握したりして、どのような授業を仕組むと良いか考えた。

分析や協議については、学年部ごとにグループを作って行った。また、分析に使った資料については、経年の変化がみられるように、過去3年間分のデータを手元に置いて分析・協議を行った。ワークシートには、調査問題の分析と、調査結果から成果と課題を見出し、今後の取組の重点・指導改善の視点について意見を出し合った。協議後は、研修前に答えた質問と同じ質問（「自校の伸ばすべき、資質能力とはどんなものか」）を記述してもらった。100分間の研修会のうち、約60分を分析と協議の時間に充て、残り40分をデータの見方や分析方法の説明、事後の講評の時間に充てた。

3-2. 協議の内容

調査問題の分析

調査問題からどのような資質・能力が求められているか、どのような授業改善が求められているかの分析については、次のような意見が出てきた。

- 日常生活の場面で問いを見出し、算数で学習したことを生かして解決する力
- 複数の図や表、グラフなどを適切に読み取る力
- 長い問題文の中で、何を問われているのかを読み解く力
- 公式などを覚えるだけでなく、使いこなすことが大切
- 授業の中で、子どもが問いを見出し、友達の考えや説明で授業を進め、新たな問いを見出す授業づくり

成果

調査結果から分析した成果については、次のような意見が出てきた。

- 全国や県の平均正答率との差が縮まってきている。
- 無回答率が低くなってきた。→諦めずに取り組む力が年々ついてきている。
- 基本的な計算力は身についてきた。

さらに、このような成果が出てきた要因について児童質問紙の結果をもとに、「学校に来ることが楽しい」「読書が好き」「友達と話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」の数値が上がってきていることが、全国との差が縮まってきている要因になっているのではないかという意見もあった。

課題

一方、課題については次のような意見が出された。

- 資料や問題を読み、必要な情報を読み取り、情報を整理して答えを導き出す力が弱い。複数の資料や条件が増えると、無解答になる。
- 求め方を説明するなど記述の問題の正答率が低い。解答類型99が多く、何が問われているのか分からなくなっているのではないかと。
- 分配法則の問題の正答率が低く、（ ）を使う便利さや日常生活での利用に課題がある。
- 算数は大切だと思っているが、「算数は好き」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と答えている割合が低い。
- 具体物から数学的に抽象化して表現されたものが弱い。

取組の重点・指導改善の視点

調査結果からみられた成果と課題から、今後の取組の重点や指導改善の視点について協議した結果、次のような意見が出てきた。

○振り返りの充実

- ・学習したものが自分の身についているか、振り返りで別の問題を解いてみて確認する。
- ・振り返りで感想だけにならないように、学んだことを焦点化して自分の言葉で言語化することを大切にする。書きたくなるように教師が認め、価値づけをする。

○子ども自らが考え解決する学習

- ・子ども自ら問いを持つ楽しさや「考えることが楽しい」「～やってみたらできそう」など、学ぶ意欲を高めていく。
- ・子どもがつまずかないように教えるのではなく、教師が考えを価値づけ、考えの過程を褒めていくことで、自分の力で成功体験を積み重ねていきたい。記述に関しても、自らが書けるようにしっかり見とる。

○安心して取り組むことができる学習環境

- ・自分の考えを安心して話せる、自分の考えを認めてもらえるような学び合いができる環境づくりをする。
- ・誤答を生かして、どこが間違えたんだろうと考えたり、違う意見・考えを交流したりすることで、より良い考えを子どもたちで作っていく経験を積ませる。

3-3. 協議後の指導助言

グループ協議を終えて、それぞれのグループで出てきた話を全体で共有した後、10分ほどで纏めの話を行った。昨年度から校内研究にも関わっていることから、研究授業の様子と絡めて下記のような話をした。

無解答率が減少している結果から、子どもたちが粘り強く取り組もうとする態度は育ってきていると考えられる。一方、解答類型 99 が多いことから、問題文をしっかりと読み取ったり、問われていることを理解したりする指導が大切になってくる。授業の様子から、子どもがつまづかないよう、困らないようにと見通しを持たせすぎたり、ヒントカードを与えすぎたりしていることが見受けられる。もう少し子どもの力を信じて、あえて子どもに困らせることも大事なのではないか。困ることで、自分でしっかり考えようとしたり、友達に話を聞きに行こうとしたりする必要が出てきて、必然性のある対話的な学びや、子ども自らが考え解決していく主体的な学びにつながっていく。まずは、困っていると素直に表現できるクラス、間違えても大丈夫なんだと安心できる環境づくりが大切で、教師も子どもも解決した結果を評価するのではなく、どんな見方・考え方をしたのかを認め、考えた過程を評価していきましようと話した。また、抽象的な概念の育成が弱いという話から、低学年はやっぱり具体物操作をさせて、数や図形に関する感覚を豊かにしてほしい。具体物操作をさせた後は、必ず絵に描いてどんな操作をしたのか描かせること。具体的な絵を描いていた子も、何度も描いていくうちに、リンゴの絵が○になったり、さらに8個の○を⑧と省略して書いたり、絵の表現にも進化がある。さらに、分数や小数の学習が始まると、絵ではなかなか表せないものが出てくることから、図での表現の必要性を感じてくる。教師がこの図を描いて考えなさいと示さなくても、図で表すと便利だなと思えるように、低学年のうちから具体物操作→絵表現→図表現とつながるように発達段階に応じて系統的に指導をすることが大切である。また、問題文と絵と式、問題文と図と式を関連付けて考えていく指導の積み上げをしていくことで、問題文に書かれていることを、子ども自らが図や絵で表現し、解決していく子どもに育っていくのではないだろうかと話した。

研修会を終えての感想の記述には、様々な観点で研修を振り返っておられる記述が見られた。記述内容ごとに分類すると、下記の5つに分類された。

- ① 今後の具体的な改善の視点や取組……………19
- ② 学調分析からの気づきや有用性……………12
- ③ 教師自身の変容や気付き……………7
- ④ 指導方法の理解や指導改善の必要性……………13
- ⑤ その他（具体の記述がない）……………3

振り返りの具体的な記述については以下のとおりである。（一部抜粋）

今後の具体的な改善の視点や取組

- ・今後大切にしたいことは、日常生活で便利さを考えられる、つながる授業をしたいと思います。
- ・間違えることを恐れずに、考えることができるよう、考えた過程を褒めたり大切にしたりしていきたいです。

- ・答えが出なくても、間違えても、自分でやってみる気持ちや、教師の助けを待つだけにならないようにすること、大切だと思いました。9月から意識してみたいです。
- ・9月からは子どもたちがたくさん喋って困って、みんなで解決できるように、子どもたちの頑張りをその場でどんどん褒めていこうと思います。
- ・算数に限らず、他教科でも子どもたちにしっかりと考えさせる時間の確保をしていくことも大切と感じた。考えたことできたことを認めて褒めていきたい。

学調分析からの気づきや有用性

- ・児童がどのようなところで躓いているのか、どのような解答をしているのかを考えることができました。
- ・3年間の結果分析から、本校児童の課題というより、授業づくりの課題が明らかになってありがたかったです。系統性や、子ども自らが解決しようとする授業を目指します。
- ・今年度の結果だけでなく、昨年度の結果や全国・県と比べてどうなのかを見て分析する必要があるのだとわかりました。
- ・3年間の比較、問題類型の細かい分析など、せっかく行った学調をしっかりと自校に生かしていける力を職員全体でもつけていきたいと思いました。

教師自身の変容や気付き

- ・子どもたちに必要なことを考えることで、9月からの授業観について見直すことができました。
- ・自分の今まで「よし」と考えていたことが、違うと気付かせてもらった。
- ・自校の児童の姿について、自分の目線や他の先生方の目線から考え、今後どうすれば良いかという指導法について考えられる時間になりました。

指導方法の理解や指導改善の必要性

- ・子どもたちへの課題の提示の仕方や、取り组ませ方を変えていく必要性を感じました。
- ・つまづかせない指導は子どものためになっているのか、困らせることも大切だとわかりました。
- ・具体→抽象 いきなりではなく、具体→絵→図→数直線…少しずつ学年に応じて進める。なるほどと思いました。
- ・答えを導くまでの過程、考え方が大切だと思った。

4. 実践の評価

評価については、研修会中に利用したワークシートにおける事前事後の考え方の変化および、研修会の約1か月後に実施したアンケートの回答をもとに行った。

ワークシートでは、研修会の開始時と終了時に、同じ質問「あなたは、自校の児童が伸ばすべき、資質能力とはどんなものだと思いますか。理由・根拠とともに【具体的に】お書きください。」の回答をもらい、研修会前と研修会後の変容について見ることにした。また、ワークシートには「グループ協議のメモ」「意見・感想」

を記述してもらい、研修会直後に回収した。

事後アンケートについては、小清水ほか（2014）⁹⁾のカーク・パトリック式のアンケートを参考に、レベル1：反応レベル、レベル2：学習レベル（意識および知識）、レベル3：行動変容レベルについて、4件法の質問項目と自由記述により取得した。研修会で考えたことや話し合ったことが、実際に実践に生かすことができているかどうかを見るために、アンケートは研修会の約1か月後にFormsを使い、実施した。

ワークシートの回収については、研修会後に全員提出（26名）してもらい、アンケートの回収率は81%（21名）であった。

4-1. ワークシートの分析

研修会の開始時と終了時に行った「自校の児童が伸ばすべき、資質能力とは」という質問に対しての記述を内容ごとに分類したところ、10のカテゴリーに分類できた（図7）。事前と事後の記述内容について比較すると、記述内容に変化が見られた。事前については、子どもたちの主体性や粘り強く取り組む力や、聞く力、表現する力、読み取る力、問題を活用する力など幅広く伸ばすべき資質・能力を挙げていることが分かる。一方、事後の記述については、表現する力、読み取る力、主体性や粘り強く取り組む力など、伸ばすべき資質・能力について焦点化して挙げている。このことから、全国学力・学習状況調査の分析をすることで、具体的な子どもの誤答や、質問紙の回答から協議をすることで、取り組むべきことが焦点化され、共有されることにつながると考えられる。日頃の子どもたちの学びの様子から、教師個人個人ではつけない力や、必要な資質能力を考え教育にあたっているが、共通実践をしていくうえでも、この活動はとて意味のあるものである。

4-2. 事後アンケートの分析

4-2-1. レベル1（反応レベル）の評価（図8）

「積極的に参加することができた（3.29）」「他の先生たちと一体となって参加することができた（3.43）」から、受講者は積極的に参加し、研修が肯定的に受け止められたことが推察される。また、「今回のような研修に来年

		事前	事後
1	課題を発見する力	4	1
2	表現する力	9	12
3	読み取る力・理解する力	9	9
4	既習を活用した問題解決力	6	2
5	基礎学力	4	0
6	主体性・学びに向かう力、チャレンジする力、粘り強く取り組む力	14	19
7	コミュニケーション力、考えを受け入れる力、協働性、聞く力・訊く力・聴く力	10	1
8	自己肯定感	3	2
9	考える力	4	5
10	その他	3	2

図7 研修前後の伸ばすべき資質能力の変容

も参加したい（3.38）」から、受講者は概ね満足感を得ていたことが推察される。

4-2-2. レベル2（学習レベル）の評価（図9）

表から分かるように、全ての項目で3.14以上の評価を得た。意識では、「研修を通して授業改善の意欲が喚起された（3.48）」知識では、「研修を通して、授業改善の必要性を理解した（3.43）」の評価が高く、本研修が授業改善の必要性を感じ、意欲を高めることに有効に働いたことが分かる。

一方、「授業改善について自らの考えに自信が持てた（3.14）」や「子どもの実態に合った改善策を考えることができた（3.14）」は比較的评价は低かった。授業改善の必要性を感じたものの、具体的な取組についてイメージを持つところまでいかなかった教員もいたと推察される。

4-2-3. レベル3（行動変容レベル）の評価（図10）

学習レベルの評価で、授業改善の意欲が高まった研修であったと考えられたが、「研修を通して考えたことを実際の教育活動に生かしている（3.19）」の評価は比較的低かった。低く評価された要因としては、自由記述からも読み取ることができるので、一部を挙げる。（下線部分は筆者が追記）

レベル1（反応レベル）に関する評価 【N=21】

項目	平均値 (S. D.)
研修会に、積極的に参加することができた	3.29 (0.55)
他の先生たちと一体となって研修に参加することができた	3.43 (0.49)
今回のような研修に来年も参加したい	3.38 (0.58)

図8 レベル1に関する評価

レベル2（学習レベル）に関する評価 【N=21】

項目	平均値 (S. D.)
意識	研修を通して授業改善の意欲が喚起された
	3.48 (0.50)
知識	研修を通して、授業改善について自らの考えに自信が持てた
	3.14 (0.64)
	研修を通して、授業改善について新たな視点が得られた
知識	3.24 (0.81)
	研修を通して、授業改善の必要性を理解した
	3.43 (0.58)
知識	研修を通して、子どもの実態にあった改善策を考えることができた
	3.14 (0.64)

図9 レベル2に関する評価

レベル3（行動変容レベル）に関する評価 【N=21】

項目	平均値 (S. D.)
研修を通して考えたことを実際の教育活動に生かしている	3.19 (0.59)

図10 レベル3に関する評価

- ・授業の中で適用題などを使って、子どもたち自身が、その日の学びを振り返り理解することができたのかを確かめる時間を毎時間とるように意識しています。
 - ・10/20（金）の3年生の研究授業で「小数」の計算の仕方を説明する時間を選びました。夏の研修で「数と計算」の自校の課題は、計算はできるが、なぜそうなるのかその過程が説明できないということだとわかったので、説明の仕方や見方・考え方の力を伸ばすところに着目して学年で話を進めています。図、式、言葉などを用いて自分の考えを表現することを意識して取り組んでいるところです。学習のふり返りの視点も見直し、その時間に合う内容を5つの中から選んで書けるようにしました。
- 研修前よりも、学年内で少し意識が変わり、日常の会話の中で、今の学習の状況や内容について話し合うことも出てきました。が、日々の授業を「こなす」ということで精一杯で、なかなか「単元を通してこうしよう」とか「個に応じた少人数加配をうまく使って、2つのクラスのめざすところの違いを出そう」というところまで共有できているかと言われると、難しい状況です。いつも何かに追われているのか、ゆっくり喋る時間がないという状況で…。
- ・子どもたちが考えていることを言語化する。整理して話をする。自クラスだけではなく、学年で共通理解して実施していかなければいけない。共通理解、共通実施が大変だなと思っています。
 - ・グラフの読み取り、長い文章の読み取り、要約、重要なポイントは、赤線を引いたり、短くメモしたりすることなど、を実践したいと考えているが、なかなか継続して実践できていない。

自由記述の内容から、具体的な内容で授業改善を進めることができている先生もいれば、授業改善の意欲はあるものの、なかなか難しいと感じている先生もいることが分かる。学年で共通実践をするために、指導方法や思いを他の先生と共有したり、共通理解をはかったりすることに困難を感じているほか、継続して実践することの難しさを感じていることが分かる。

5. 総合考察

全国学力・学習状況調査の結果を分析し、学校・授業改善推進の有効な手立てにするための取組について、滋賀県の取組と校内研修会の取組から考察してきた。

滋賀県教育委員会では学力状況について、教科ごとに単年ごとの分析をし、取組の重点を示している。年によって課題となる単元に多少の違いはあるものの、子どもたちの課題は大きく変わっていない。しかし、経年で子どもの学力状況を分析すると、少しずつではあるが改善傾向が見られた。毎年課題を明確にし、県内の学校訪問で指導の重点について指導助言を繰り返してきたことが、この結果につながっていると考える。特に、記述式の問

題に対する無解答率が年々減少してきていることは、県内の多くの学校で、方法や理由、事実など子どもが考えたことを説明したり、記述したりする活動が設定されているような授業が増えてきていることが結果に表れてきていると考える。

今回の研修会のアンケート調査より、各学校で、研修会などにおいて全職員で全国学力・学習状況調査の結果を分析し、自校の子どもの学びの状況を把握し、これまでの取組の成果と課題を協議することは、授業改善の意欲を高め、組織を活性化させるために非常に有効に働くと考えられる。また、単年の結果分析ではなく、複数年の経年での結果を分析することで、学校全体の傾向が分かり、先生方も自分事として捉えることにつながったことから、今後も引き続き経年分析を行っていく重要性を感じた。

一方、研修を通して授業改善の意欲は高まったが、実際の教育活動に生かすことが難しいという課題も見られた。授業改善の意欲はあるが、具体的に何から始めればよいか、することが多すぎて継続的に取り組むことができないという実態がある。具体的にアクションプランを実行するためには、学年や学校全体での具体的な共通実践事項を協議し、定期的に振り返り、評価することが大切である。あれもこれも実践するのではなく、取組事項を焦点化して、全職員で共通実践をしていくために、校内研修会では今後の具体的な取組まで協議の中で決める時間を設けることも必要である。そして、共通実践の取組の成果と課題について、定期的に見直し、アクションプランを改善していくというPDCAサイクルを年間計画の中でどのように位置づけるかなどの仕組み作りについても今後の課題である。

〔謝辞〕

本研究に関わり、研修会やアンケート調査などに協力してくださったH小学校の教職員の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 令和5年度全国学力・学習状況調査 報告書
令和5年8月文部科学省 国立教育政策研究所
- 2) 令和5年度全国学力・学習状況調査【都道府県別】および【指定都市別】調査結果資料25 滋賀県
文部科学省総合教育政策局調査企画課学力調査室
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部
学力調査課
https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/factsheet/25_shiga/index.html
- 3) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説算数編
平成29年7月文部科学省 P38
- 4) 全国学力・学習状況調査解説資料（平成19年度～令和5年度）
文部科学省国立教育政策研究所

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>

- 5) 令和 5 年度全国学力・学習状況調査の結果課題の改善に向けた取組の重点
令和 5 年 8 月 7 日滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課
- 6) 令和 3 年度全国学力・学習状況調査の結果課題の改善に向けた取組の重点
令和 3 年 9 月 10 日滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課
- 7) 第Ⅱ期学ぶ力向上滋賀プラン～「読み解く力」の育成を通して～
平成 31 年 3 月 18 日(令和 4 年 3 月 23 日一部改訂)
滋賀県教育委員会
- 8) 滋賀の教育大綱第 4 期教育振興基本計画素案
令和 5 年(2023 年)1 月 17 日 第 4 回滋賀県総合教育会議 資料 1 - 4
<https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5372414.pdf>
- 9) 小清水貴子, 藤木卓, 室田真男(2014) 校内における ICT 活用推進を促す教員研修の評価方法の提案と効果の検証 日本教育工学会論文誌, 38 (2), 135-144